

よみて披講などして、古の塚のすがた哀れき、今の如くに覺えて、

古塚のかげ行水のすみだ川聞わたりてもぬる、袖かな、○中次の日淺草を立て新羽といへる所に赴き侍るとて、道すがら名所ども尋ねける中に、忍の岡といへる所にて、松原の有ける陰に休みて、

霜の、ち現れにけり時雨をば忍びの岡の松もかひなし、こ、を過て、小石川といへる所にまかりて、

我方を思ひふかめて小石河いつをせにとかこひ渡るらん、こえの里といへる所に行くれて、

暮にけり宿りいづくといそぐ日になれもねに行鳥越の里、芝の浦といへる所に到りければ、鹽やの烟うち靡て、物寂しきに、鹽木運ぶ舟どもを見て、

やかぬよりもしほの煙名にぞたつ舟にこりつむ芝の浦人、此うらを過てあら井といへる所にて、蘆まじりおふるあらぬのうち靡き波にむせべる岸の松風、まりこの里にてよめる、

東路のまりこの里に行か、りあしもやすめず急ぐ暮かな、駒林といへる所に到りて宿をか
り侍るに、淺ましげなる賤の伏屋に、落葉所をせき侍るを、ちとはきなどし侍りける間、た、すみ
て思ひつゞけ、る、

つながれぬ月日しられて冬きぬと又はをかふる駒林かな、新羽を立て鎌倉に到る道すがら、
様々の名所ども、委しく記すに及び侍らず、かたびらの宿といへる所にて、

いつ來てか旅の衣をかへてまし風うら寒きかたびらの里、岩井の原を過るとて、
すさまじき岩の原をよそに見て結ぶぞ草の枕成ける、もちゐ坂といへる所にて、俳諧の歌、